

発行者兼編集者
鵜 戸 神 宮
社 務 所
印刷所
西 日 本 印 刷

謹
賀
新
年

鵜戸の神窟より

宮司 杉田 秀清



太平洋の大海原を望み、千古の洞窟の中に鎮ります。鵜戸神宮は、清麗にして、ご神威は赫々として迫るものがあります。

清々しい平成十三年辛巳年の年頭にあたり、新玉の鵜戸より新春の祝詞を申し上げます。

鵜戸神宮におきましては、新しき年の始めに若水をくみ、元旦午前零時より歳旦祭、二日には初日供祭、三日には元始祭と朝日の豊栄昇に祭典を斎行いたしました。

聖寿の萬歳、皇室の弥栄を御祈念し、国家の益々の隆昌と繁栄を祈り、氏子崇

敬者の方々のご平安とご多幸をお祈りして、この年がよき年でありませう。祭典におそかに、斎行いたしました。皆様にはご家族お揃いで新玉の年をめでたくお迎えのことと謹んでよろこび申し上げます。

当宮では、平成十二年は御神田を百三十年ぶりに復活し、四月二日御田植祭、

八月一日には抜穂祭を斎行し、全国でも一番早い新米を収穫することが出来ました。その為には水の調整、日照の心配など……自然の営みの中にあつて、額に汗して作業に務め、稲の成育に心を配つたことにより立

派なお米が稔りました。新嘗祭、そして新年の歳旦祭・元始祭の白米、お鏡餅としてお供えることが出来ました。

この間に自然との向合い、小学生との触れ合い、氏子区域との結びつきなど計り知れないものを得ることができたことを確信しています。

皆様方にとりまして、平成十三年が佳き年で、すばらしい年になりますようお祈り申し上げます。鵜戸神宮も日々新に清々しく、変化しています。どうぞご家族おそろいの上、ご参拝下さいませ。どうぞご参拝下さいませ。どうぞご参拝下さいませ。

抜穂祭 齋行

天候不順もなく、太陽の光を十分に浴び、たわわに実った稲が黄金色に輝いていた大浦地区の御神田において、八月一日午前十三時十分より抜穂祭が斎行された。この日は生憎の雨となつたが責任役員、総代他多数の参列を賜つた。

御神田は「鵜戸の宮居」(昭和十七年)によると、神供田は二神山にあつたが、今は所在を失っている。と記されている。

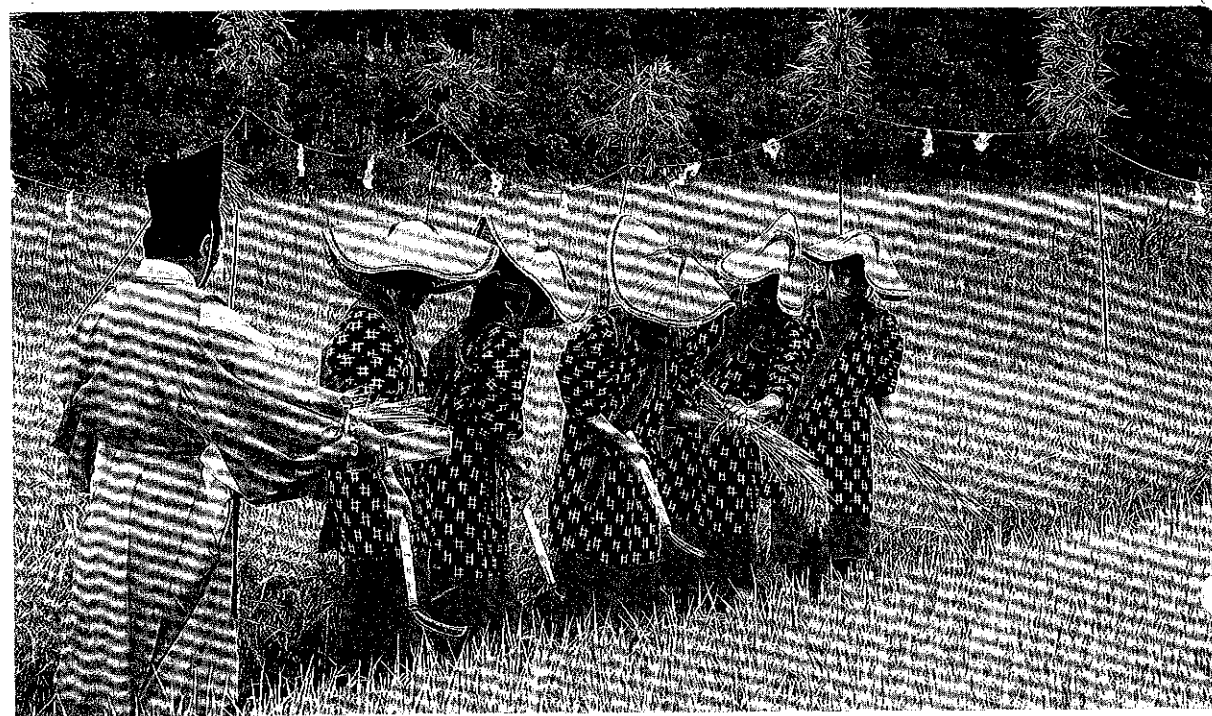
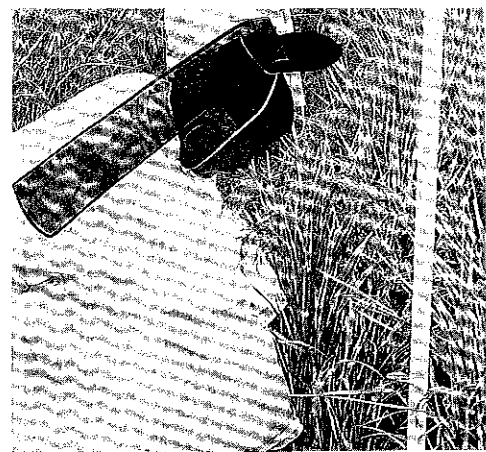
現在までその所在は分かっていないが、大浦地区の氏子の方々の協力を得て、御神田を復活。四月二日に御田植を斎行し、毎月十五日を御神田月次祭と定め、稲の成長を祈願してきた。

抜穂祭では、齋主祝詞奏上の後、齋主による抜穂の儀が行われ、続いて田長の「刈りませ」を合図に、地元高校生と巫女五名の刈女が一株一株稲を刈り取り、田主が神前に供えた。

祭典終了後、宮司をはじめ責任役員、総代とともに青少年教化活動の一環として、地元小学生にも参加してもらい稲刈りを行った。天候が悪い為、少ししか刈り取る事ができなかったが、初めて稲刈りをする小学生は鎌の使い方を教わりながら、高齢の氏子は昔を懐かしみながら刈り取っていた。晴天となった八月三日は、職員が自然の恵みに感謝しながら収穫。十一月二十三日の新嘗祭で御本殿に捧げられた。



御神田月次祭





地場産品フェア



浦安の舞



鵜戸さん獅子舞

井山氏は、今年早々にも再来目され作品を仕上げ、今年五月に宮崎市の県立美術館で、個展が開かれる前に奉納される予定である。

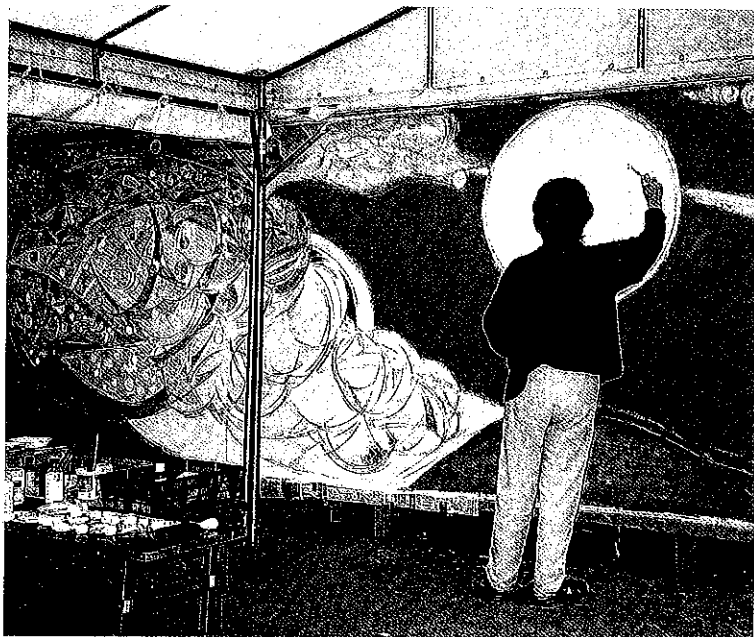
作品のテーマは、日向神話の世界。鵜戸の森や豊玉姫、山幸彦が描かれ、神話を持つている純粋な世界がアクリル樹脂絵具で表されている。

宮崎市出身で、インドネシアのバリ島在住の画家井山忠行氏が、十月六日より十一月二十七日まで、当神宮の社宅に入り、昨年制作された下絵を元に奉納画を制作された。

制作に先立ち、十月十日には仕事始めの神事が斎行され、作業の安全を祈った。奉納画は、紙肥杉製のキャンパスで、縦一九五センチ、横一六〇センチのキャンパスが四枚、縦一六八センチ、横一四五センチのキャンパスが二枚、計六枚の大きさである。

画家 井山忠行氏 奉納画制作

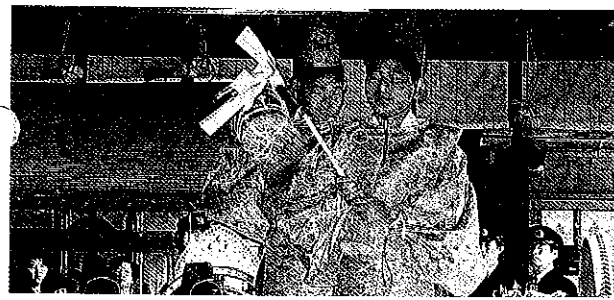
井山氏は、当神宮宮司と中学、高校の同級生で、高校卒業後、本県出身の瑛九を中心にした「アデモクラート美術協会」に参加。会員として瑛九や加藤正らに学んだ。



新嘗祭 斎行

十一月二十三日、今年収穫された穀物を神々に捧げ、その御恵みに感謝する新嘗祭が全国の神社で行われた。当神宮でも午前十時三十分、責任役員をはじめ総代・官公庁関係・崇敬者等多数の参列を賜り、宮司以下祭員の奉仕によって厳粛に斎行された。

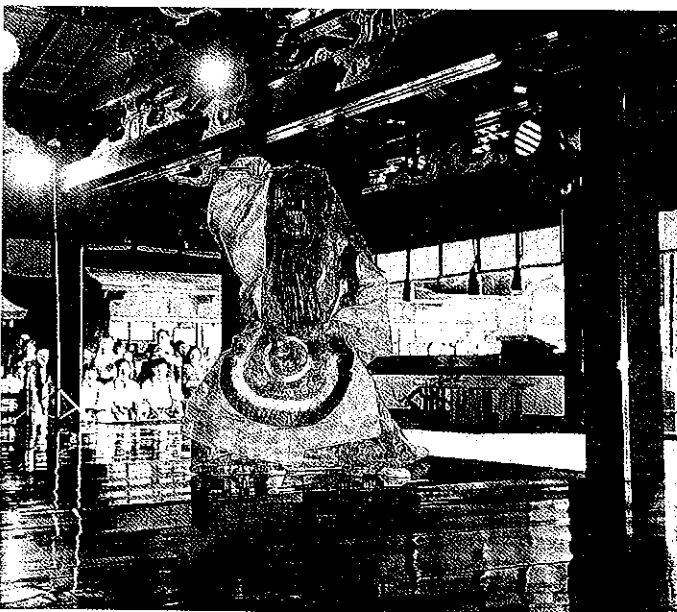
された初穂米が奉納された。又、日南・串間市をはじめ南那珂郡内の各地区より献穀米・献酒・献菓子等が献上され、宮司祝詞奏上の後、鵜戸小学校三・四年生による「子ども神楽」が奉納された。わけでも「子ども神楽」は、子供の可愛さと収穫を祈る純粋な仕種があいまって参列者を非常に喜ばせた。



秋の縁日大祭 斎行

十一月四日・五日に「秋の縁日大祭」が斎行された。縁日大祭は古来、春三月の祭礼日に大勢の参拝者で賑わったと伝えられており、この事を奉祝する為、春と秋の年二回行われている。五日は、責任役員・総代をはじめ多数の参列を賜り、

午前十時三十分より祭典を厳粛に斎行。祭典終了後、「浦安の舞」「鵜戸さん獅子舞」舞楽「納曾利」が演奏された。参道では両日、地場産品フェアが開催され、参拝者が海産物や農産物を買求め、終日賑わっていた。



納曾利



平安神宮敬神婦人会会長 磯松洋子氏他



桃山陵墓監区事務所所長 村山和成氏他

平成13年 厄祓一覧表 (但、数え年)

女性			男性		
昭和46年 31才	厄入	昭和37年 40才	厄入	昭和53年 24才	
昭和41年 36才	前厄	昭和36年 41才	前厄	昭和52年 25才	
昭和40年 37才	本厄	昭和35年 42才	本厄	昭和51年 26才	
昭和39年 38才	後厄	昭和34年 43才	後厄	昭和50年 27才	
昭和42年 35才	厄明	昭和33年 44才	厄明		

厄年は人生の転機にあたり、心身共に苦勞の多い年令と言われています。
年の始めに御参拝を賜り御祈禱を受けられまして、本年も無病息災にてお過し下さいますよう御案内申し上げます。

厄入・厄祓・厄明の御案内

社務日誌抄

- 1月1日 歳旦祭
- 1月3日 元始祭
- 1月11日 日南地区交通安全全祈願祭
- 1月25日~27日 五神宮宮司会館中参賀の為宮司出向
- 1月28日 霧島東神社宮司 黒木茂一氏参拝
- 1月31日 鹿兒島県護国神社宮司 野村浩平氏他1名参拝
- 2月1日 例祭
- 2月6日 第28回鵜戸神宮奉納四半的弓道大会
- 2月11日 紀元祭
- 2月17日 祈年祭
- 2月18日 貴船神社宮司奥澤公慶氏他4名参拝
- 2月25日~26日 縁日大祭
- 2月26日 第14回シヤンシヤン馬道中唄全大会決勝
- 3月28日 海上自衛隊にちなん艦長 澤田信雄氏他3名参拝
- 4月2日 御田植祭
- 4月20日 国学院大學五三會 宇治土公貞明氏他13名参拝
- 4月26日 任役員会



貴船神社宮司 奥澤公慶氏他



国学院大學五三會 宇治土公貞明氏他



海上自衛隊にちなん艦長 澤田信雄氏他

- 4月28日 氏子・崇敬者総代会
- 5月5日 節句祭奉祝行事
- 5月12日 いさみ太鼓奉納
- 5月19日 宮崎県 都萬神社宮司 川越祐一氏他23名参拝
- 5月20日 宮内庁長官官房主計課 飯塚秀行氏他1名参拝
- 5月22日 天皇皇后両陛下 御渡御行幸啓安泰祈願祭
- 6月1日 別当宮司先賢慰霊祭
- 6月2日 天皇皇后両陛下 御渡御幸啓安泰祈願祭
- 6月17日 鵜戸神宮敬神婦人会総会
- 6月28日 皇太后陛下御崩御奉告祭
- 7月4日 兵庫県神道青年会淡路支部支部長 高島祥司氏他7名参拝
- 7月30日 大祓式
- 8月1日 茨城県久慈支部支部長 菊地迪親氏他25名参拝
- 8月5日 徳島県 丹生八幡神社宮司 丹生皓久氏他4名参拝
- 9月5日 南那珂支部大祓式
- 10月1日 南那珂支部大祓式
- 11月3日 領布祭
- 11月4日~5日 明治祭
- 11月6日 縁日大祭
- 11月13日 平安神宮敬神婦人会会長磯松洋子氏 平安神宮 祿宜赤木尊文氏他17名参拝
- 11月23日 新嘗祭
- 12月23日 天長祭
- 12月31日 大祓式・除夜祭



久慈支部支部長 菊地迪親氏他

平成十三年辛巳年鵜戸神宮神事一覽(一月~六月)

日	時間	祭	名
1日	0時	初	元旦
2日	8時30分	初	日供
3日	8時30分	祭	元
4日	10時	祭	緑
9日	10時	祭	一之卯
12日	11時	祭	紀
17日	10時30分	祭	祈年祭(五穀豊穣祈願祭)
24日	午前	祭	播種祭(初午祭)
20日	午前	祭	春
18日	午前	祭	御田植
1日	10時	祭	月次
3日	10時	祭	神武天皇御陵遙拝式
10日	10時	祭	自動車祓所鎮座記念祭
30日	10時	祭	月次祭・除祭
1日	10時	祭	天皇皇后陛下御参拝記念祭・縁日祭
4日	10時	祭	皇太后陛下御参拝記念祭・縁日祭
5日	9時	祭	別当宮司先賢慰霊祭
9日	10時	祭	一之卯
10日	10時	祭	末
30日	16時	祭	大祓式

燈籠 能面翁奉納

鵜戸の大神様の恩恵に感謝され、燈籠と能面翁の奉納があり、それぞれ厳肅に奉告祭が斎行された。

七月八日

小倉宗衛氏（東京都）より

能面翁一面 (1)

九月一日

藤浦久敏・八千代御夫妻

(南郷町) より燈籠一基 (2)

十月十四日

岩下産業株式会社代表取締役

役 前園善彦・弘美御夫妻

(宮崎市) より燈籠一基 (3)

麻沼雅海・朝子御夫妻（東

京都）より燈籠一基 (3)



(1)



(3) 中央・向かって右側



(2) 向かって右側

七五三詣

鵜戸山に秋の気配が深まる中、十一月十五日は晴着姿の子供たちの元気な声が岩屋に響き渡り、大変な賑わいを見せた。

七五三詣りの起源は、天和元年（一六八一）のこの日に、五代將軍綱吉公の子息、徳松君の髪置祝いが行われたことを前例に始まったとも伝えられている。一般に三歳の男女は「髪

置」と言い頭髪を伸ばし始めることを、五歳の男子は「袴着」と言い初めて袴を着用することを、七歳の女子は「帯解」と言い幼児用の紐を解き大人と同じ帯を用いることを表している。

七・五・三の歳の数については、縁起のよい陽数であることに結びついたものである。境内では、当宮にゆかりのある、うさをぬいぐるみで準備し、お祝いの子供たちを迎えて記念撮影をし、写真を無料進呈した。



編集後記

○社報第五十一号をお届け致します。

○今年は皇紀二六六一一年、西紀では二〇〇一年、二十一世紀に成りました。確か私が小学校六年生の頃の国語の教科書に、二十一世紀に成った時には科学技術はどのくらい発達し、私たちはどのような生活をしているだろうか、といったような事が記されていたと思います。私たちは作文を書かされ、皆は宇宙旅行、海底都市等さまざまな事について書いていました。

私は大きな地震がきたら、建物が宙に浮いて被害を少なくするといった内容の作文を書いた記憶があります。

あれから…年、本当に月日の立つのは早いものだとつくづく思う今日此頃です。（中武）